

地域在住の後期高齢者・超高齢者 における認知機能の検討

—80-90歳代のMini-Mental State Examinationの結果から—

第31回日本老年精神医学会, 2016年6月23-24日, 金沢



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR

○田里久美子¹⁾, 船木桂¹⁾, 江口洋子¹⁾, 高山緑²⁾, 新村秀人¹⁾, 三村 将¹⁾

¹⁾慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室 ²⁾慶應義塾大学 理工学部

key word: 超高齢者, 認知機能, Mini-Mental State Examination (MMSE), serial7 (100-7)

Introduction

近年, わが国は超高齢社会に突入しており, 急速な高齢化が進んでいる. 80歳以上の人口は800万人を超え(2012年), 総人口に占める80歳以上の割合は6.4%と, この10年で2.6倍に上昇しており, 今後は後期高齢者以上の世代が急増することが見込まれる.

高齢化の様相は多様である. 健康長寿を考える上で, 高齢者をひとまとめにして扱うのではなく, 年齢による違いを捉える必要がある. 本研究では, これまでほとんど報告がない80歳以上の年代別の認知機能に焦点を当てる.

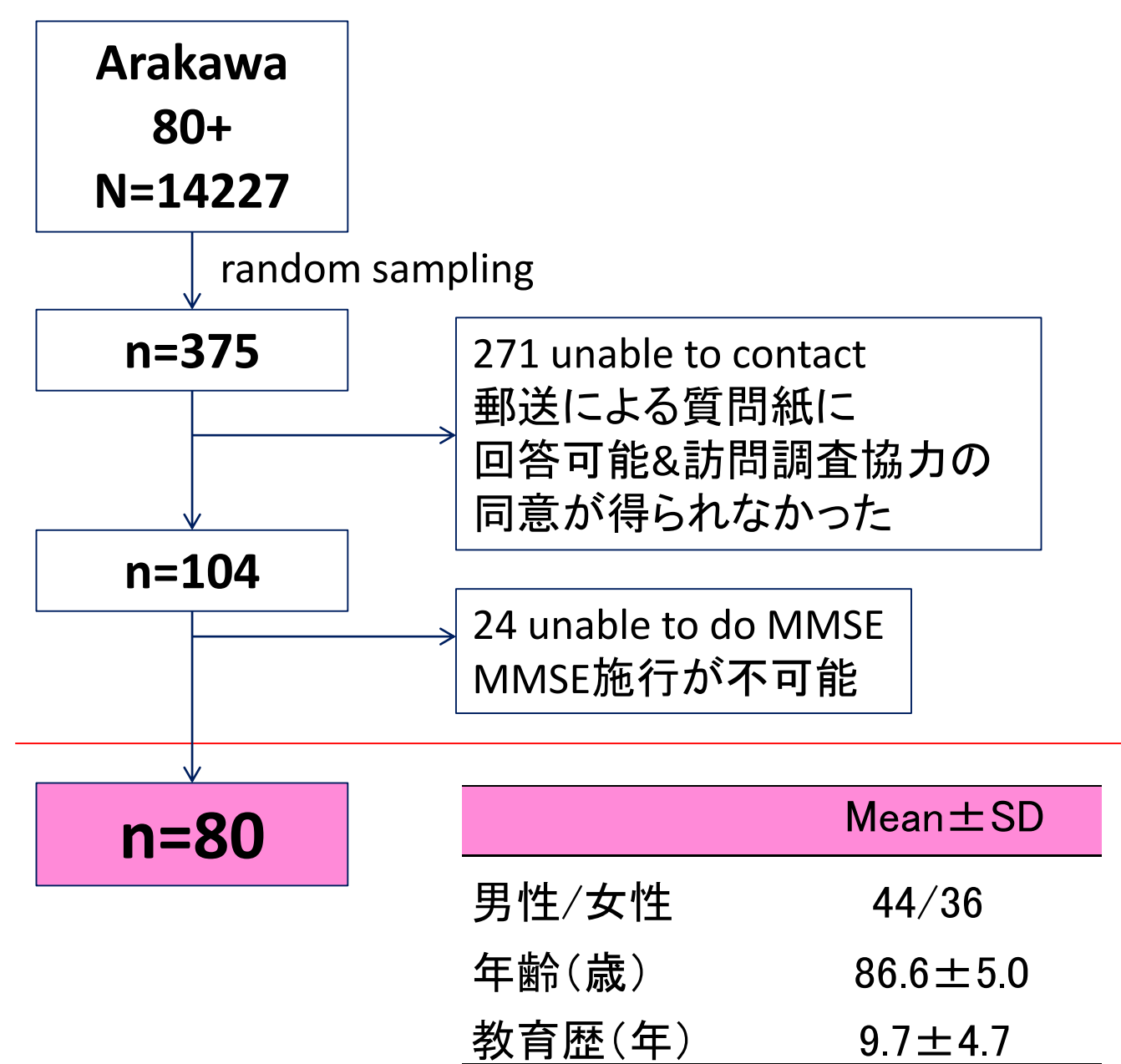
健康長寿につながる認知機能の加齢過程を探る為, 80歳以上の年齢群差の認知機能を詳細に検討する

Material & Method

対象地域: 東京都荒川区

協力者: 住民基本台帳から無作為抽出した

80歳以上の高齢者 (2016.1.1時点)



変数:

背景情報	認知機能
年齢	—客観的指標— •Mini-Mental State Examination (MMSE) 総得点
性別	•MMSE下位項目 (見当識, 記銘, 遅延再生, 注意, 逆唱, 呼称, 復唱, 命令, 読字, 書字, 構成)
教育歴	—主観的指標— •主観的記憶障害 ①「物忘れ」はありますか(自覚的物忘れ) ②家族や周りの人に物忘れを指摘されますか ③一人で電話をかけることができますか
同居人数	

解析方法:

I) 解析対象者を年齢別に4群(80-84歳群, 85-89歳群, 90-94歳群, 95-99歳群)に分け, MMSEの総得点および下位項目の成績を従属変数とし, 1要因分散分析(被験者間計画)を実施.

II) Iで得られた注意機能課題「100-7」の計算過程(100-7, 93-7, 86-7, 79-7, 72-7)における年齢別の成績を比較するため1要因分散分析を実施.

III) Iで得られた注意機能, 背景情報を独立変数, 主観的記憶障害の3項目の変数を従属変数として, 各々について多重ロジスティック回帰分析を実施.

Results

◆解析対象者(n=80)の年代別の背景情報をTable.1に示す.

Table.1 年齢別4群の背景情報

		80-84歳群 (n=37)	85-89歳群 (n=12)	90-94歳群 (n=24)	95-99歳群 (n=7)
性別	F/(%)	51.3	41.7	41.7	85.7
年齢(歳)	Mean ± SD	81.6 ± 1.2	86.3 ± 1.7	91.6 ± 1.3	96.4 ± 1.1
教育歴(年)	Mean ± SD (Range)	10.2 ± 3.0 (5-19)	9.3 ± 1.8 (6-12)	9.4 ± 2.7 (6-15)	8.0 ± 1.9 (5-10)
独居	n/(%)	32.4	33.3	33.3	14.3

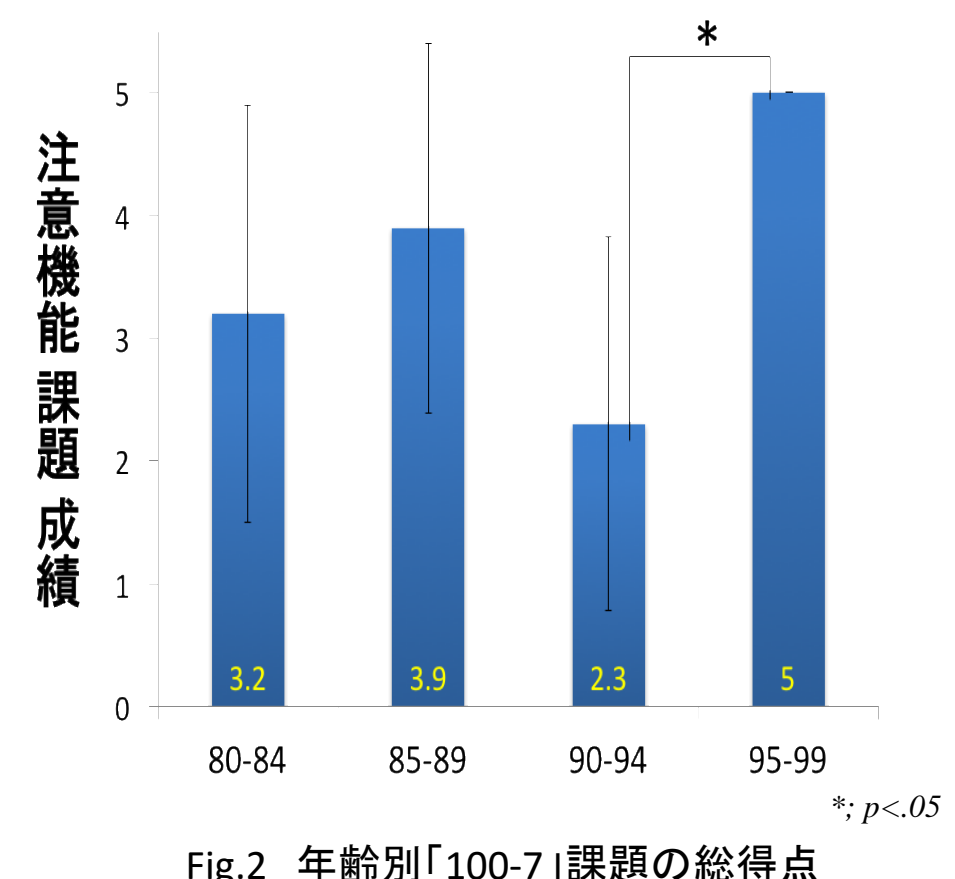
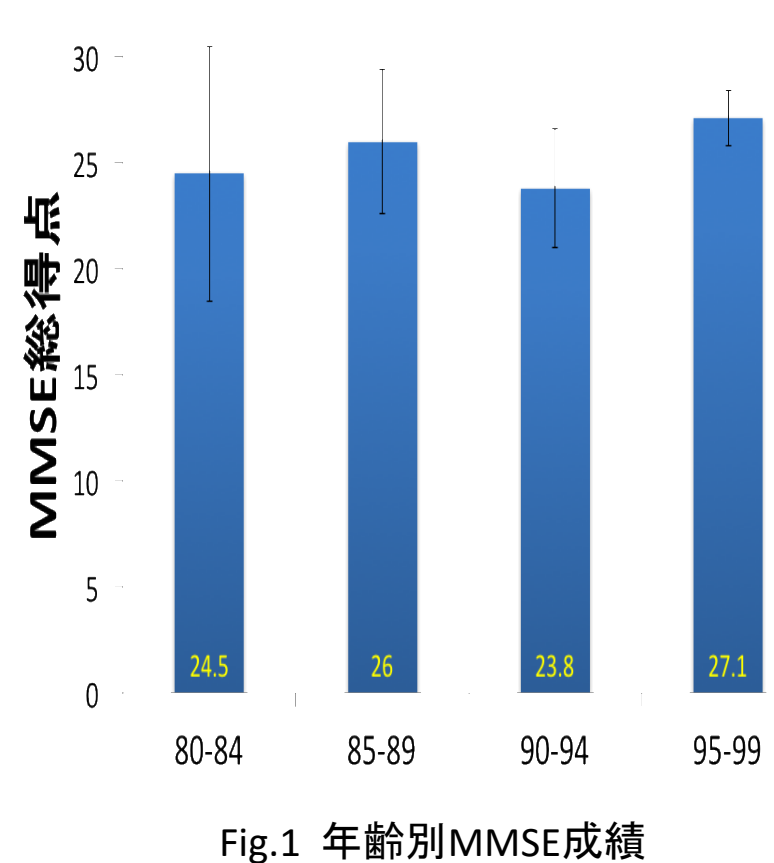
I) 年齢群差について, MMSE総得点には有意差なし(Fig.1).

MMSEの下位項目において, 注意機能のみに

年齢の主効果が認められ ($p=.03$),

多重比較の結果, 90-94歳群に比して95-99歳群で

有意に高かった($p=.04$)(Fig.2).



II) 注意機能課題「100-7」

では, 2回目の計算「93-7」

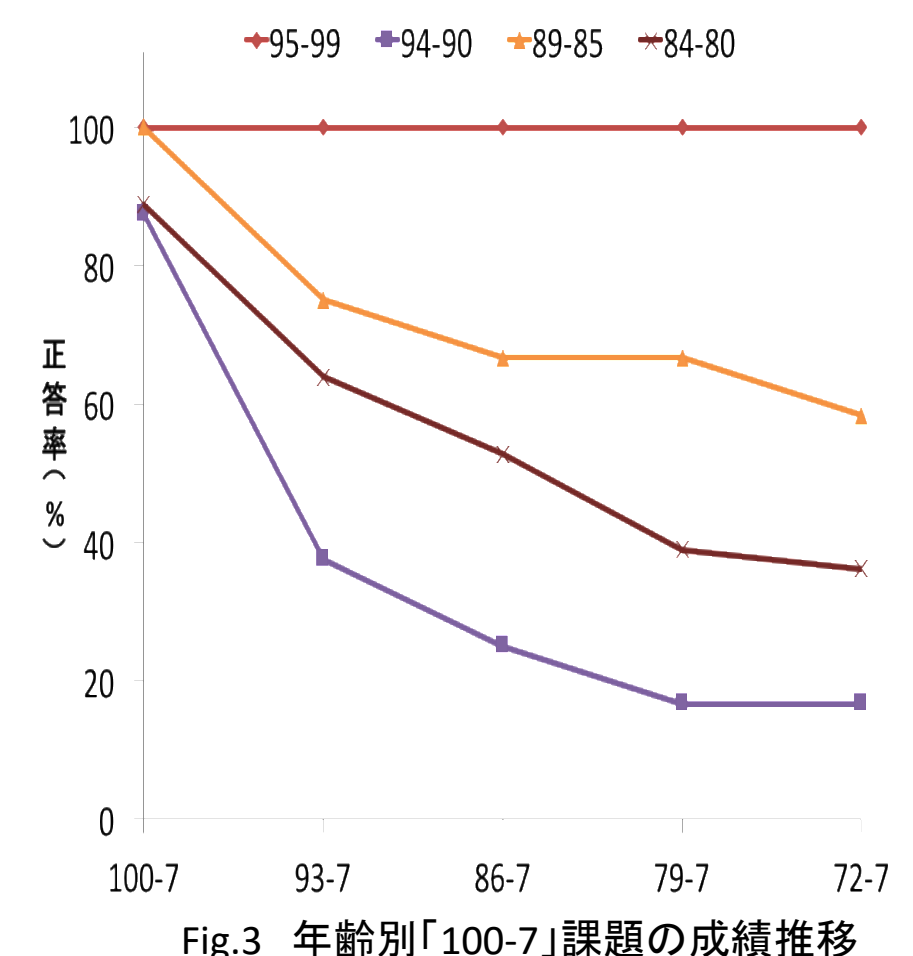
時に群間差を認め($p=.009$),

多重比較の結果,

90-94歳群と95-99歳群間

で有意差が認められた

($p=.013$)(Fig.3).



III) 「自覚的物忘れの有無」に影響する変数として,

注意機能の成績が選択された(モデル χ^2 検定で $p < .05$).

注意機能のオッズ比は0.647 [95%CI: 0.43-0.97]で,

変数の有意性は, $p < .05$ であった.

予測値と実測値の判別の中率は87.5%であった.

Discussion & Limitation

◆本研究は, 横断法であり, 各群の分散が大きい為, 認知機能の加齢過程については検討できなかった. しかし, 95歳以上の超高齢者の認知的特徴が明らかとなった.

◆一般に, 注意機能は加齢の初期段階で低下するが, MMSEに反映される全般性認知機能を維持していた95-99歳群は, 注意機能を高水準で保持していた(高機能を保った者が生き残っていた可能性がある). 認知機能を保持し, 注意機能を高く保つことは, 健康寿命を延ばすことに寄与する可能性がある.

◆「主観的記憶障害」と「注意機能」の関連は, 単に健康寿命だけではなく, 最終的にはwell-beingに寄与する可能性がある. 今後はN数を増やし, そのメカニズムを追っていく必要がある.

Acknowledgments & COI

本研究に, ご協力頂きました荒川区民の皆様, 荒川区高齢者福祉課の皆様にご感謝申し上げます. 本研究は, 平成27年度 慶應義塾学事振興資金「高齢者の生活の知恵の評価」の助成を受けています. なお, 本演題に関連し開示すべき利益相反関係にある企業などはありません.